

明治 22 年 8 月

天理大学人文学部講師

深谷 耕治 Koji Fukaya

増野正兵衛は、明治 17 年の初参拝のとき、教祖から「いずれはこの屋敷に来んならんで」とのお言葉を頂き、その後おぢばへの移住を度々促されていた。しかし、当時増野家は神戸元町で洋品店を営んでおり、神戸のような繁華な町から大和の草深いところへの移住にはなかなか決心がつかなかった。「おさしづ」の割書きを見ると、とくに妻の躊躇^{ためら}いが強かったようである。今回は、そうした中での明治 22 年 8 月の「おさしづ」を見ていきたい。

- ・明治 22 年 8 月 7 日（陰暦 7 月 11 日）午前 8 時：増野正兵衛裏向悪しく、左耳鳴り、右鼻瘡頭しんの伺／押して国元だんへ通路せよとの事でありますか伺
- ・8 月 11 日（陰暦 7 月 15 日）：増野正兵衛身上下痢の伺／押して願
- ・8 月 17 日（陰暦 7 月 21 日）：増野喜市の身上心許なく、神様の御守護にて全快致せしや、遠国の処にて案じらるゝに付伺
- ・8 月 19 日：清水与之助身上の願
- ・同日：清水はる熱強く、上へ戻すに付願
- ・8 月 23 日（陰暦 7 月 27 日）：増野正兵衛神戸へ帰宅御許し願／同日同人妻いと儀、大和へ引越すに未だ早いと申します、これは理の論しが足りませんか、私の心が定まりませんか付伺
- ・8 月 24 日：兵神分教会所にて参詣人不思議なる御自由あり、いかなる御知らせなるや、清水与之助、増野正兵衛、中井宗七より伺
- ・8 月 26 日（陰暦 8 月朔日）：増野正兵衛身上障り伺
- ・同日：兵神分教会所講社の人多く泊める事伺

明治 22 年 8 月 7 日、正兵衛は、「裏向（大便）」の調子が悪く、さらに「左耳鳴り」「右鼻瘡頭しん」（右鼻頭のおでき？）の症状があったので伺うと「遠くへ一つへ通路又々通路、何かの事情運んで又々の道という」とあり、さらに「国元に通路（連絡）せよ、とのことか」と伺うと、「さあへ一日早く通路、一つ十分一つの理を知らして早く事情運ぶよう」と諭されている。神戸にいる人たちへの連絡を促されていることが読み取れる。

4 日後の 11 日、今度は下痢の症状で伺うと「何にも身上心に案ぜる事は要らん。一日の日生涯の理が治まる」と諭され、押して伺うと「所を変えて治まるもいんねん一つの理、安心させてくれ」「遠く所は事情言葉々々を以て運ぶへ。十分めんへ何にも案ぜる理は要らん」と述べられている。神戸からおぢばへと住み替えても「いんねん一つの理」で治まることや、神戸という遠い場所にいる者たちにも心配させないように言葉でしっかり伝えるようにと諭されていると解される。

正兵衛の甥である増野喜市（姉まちの息子）は、重度の肺病を患っており、7 月 28 日に「おさしづ」を伺うと、「皆これまでの聞きたる話を伝えて、前生いんねんの事情も伝えてやるよう」と諭されていたが、8 月 17 日に改めてその後御守護を頂いたかどうか伺っている。「さあへ遠く事情、尋ねる処、幾

重十分一つ治まりある。一つの事情近々一つ便り近々」と、近々御守護頂いた便りが来ることが示されている。

8 月 19 日、清水与之助も身上の患いで伺っている。「朝という、十分晴天」「年々事情いつへまでやない。難しい事やないで」と述べられており、1 年単位で取り掛かるような事柄でも、一日一日の「朝」の迎え方について論されているのではないかと。また、同日、与之助の妻・はるも「熱強く、上へ戻す（嘔吐）」で伺うと、「あたゑいつへまでのあたゑ、皆揃うてあたゑという」と述べられており、周囲の者との間の「遠慮気兼ね」は持たずに、一手一つに通ることの大切さが伝えられていると解される。

8 月 23 日、正兵衛が神戸に戻ることを伺うと「さあへ心に掛かるだけ。身は一日の日、急いて心置き無う運ぶがよい」と諭されている。その際、正兵衛は妻のいとが大和への引越越しはまだ早いということについて、「理の論しが足りない」のか、「正兵衛自身の心が定まっていない」のかについても伺っている。「一寸の処深き処、深き心はあれど一寸の理を思う」と、深く思索する中でささいな事に心が囚われてしまうことを述べられた上で、「前々古き一つの理、所々十分の事情話してくれるよう」と、以前から伝えている「古い一つの理」について十分話してくれるようにと諭されている。おそらく、教祖から「いずれはこの屋敷に来んならんで」とのお言葉を頂いたことではないか。そして「それより一つの心を定めて十分許そう」と述べられている。「許す」というのは、なかなか心が定まらない現状に関してだと読み取れる。この日の割書きには具体的な問いかけが記されており、正兵衛の切なる思いが感じられる。

さて、翌日、兵神分教会の参詣人に「不思議なる御自由」があったようである。具体的にどのようなことがあったのかは明らかではないが、親神様からの「いかなる御知らせなるや」を清水与之助、増野正兵衛、中井宗七の 3 名の連名で伺っている。「一つ談示何かの事、案じの事情を以て一つ成らん事情、自由の理がある中に、一つ案じると、みんなで談じ合いながら進めている事柄が成立しないのは、神の自由自在の働きに対する案じ心があるからであると諭された上で、この度の「不思議なる御自由」によって神様のお働きが感じられたなら、「自由何処から見ても一つ鮮やか運んでくれるよう。速やかという理を知らし置こう。」と説かれている。

8 月 26 日、正兵衛が身上の障りで伺うと「内々十分どちらなりとも生涯治め」と、家内の誰彼にも十分に生涯の理を治めるように諭されている。正兵衛たちのおぢばへの伏せ込みが一時的なものではなく、生涯の心定めであることが読み取れる。

同日、兵神分教会の人々を大勢（親里に）宿泊させることについて伺っている。「日々の処出入り、道のため十分の理、日々世界一つの理から世上一つの理」というお言葉から、信仰者以外の人々も含まれていたのではないかと。「どうであろう、それはどうである、全然心に掛からんよう知らせ置く」と、そうした人々が宿泊することについてとやかく言う必要は少しもないと諭されていると解される。どんな人であっても受け入れていく姿勢について説かれているのではないかと。